

2 視聴覚教材を利用して国家の特性を考察することに配慮した学習指導案

教科(科目)	地歴(地理 B)	単元名	ゲルマン系民族の生活と文化 本時(5 時間目 / 7 時間)
本時の主題	V T R と写真等の視聴覚教材を用いた国家の地誌的考察		
本時の目標	(1)ドイツ人を事例としてゲルマン系の人々の生活文化について関心をもつ。 【関心・意欲・態度】 (2)旧東西ドイツの写真から統一後も依然として残る東西格差について理解する。 【知識・理解】 (3)東西ドイツ統一後の生活変化を考察させ、統一後の諸問題を把握させる。 【思考・判断】		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・ゲルマン系の人々の分布を理解する。	地図帳でドイツの位置を確認する。 首都ベルリンはヨーロッパの中心といえることに気付く	学習対象地域と空間を理解する。	
・ドイツ人生活の概略を知る。 (ドイツの地形と気候をどのように生活に利用しているのか考えさせる。) 20分(経過時間) ・6枚の写真から統一後の旧西ドイツと旧東ドイツの現状の差について考える。 ・写真1・2・3・4から旧西ドイツの特徴を考察する。 ・写真5・6から旧東ドイツの特徴を考察する。 ・統合されたことによる問題点を考えさせる。	V T R 中のドイツの食文化からドイツの風土を理解する。 Question 1 V T R 「人間は何を食べてきたのか」を視聴し、ドイツの人々の生活を考えよう。 S : ハム作りは普段の生活の中にある。 ハムは贅沢品ではない。 ドイツの夕食は質素である。 ドイツの厳しい風土を反映している食べ物としてハムの他にジャガイモ、黒パン、ビールがある。 豚はやせた土地の雑草や森の木の実に育つ家畜である。 冷蔵庫などのない時代から、冬の間のための保存食がハム・ソーセージなどであった。 写真から統一後も格差が残っているドイツの様子を理解する。 Question 2 6枚の写真は旧西ドイツと旧東ドイツのどちらか、その理由も考えよう。 考察の観点として (1)何が写っているのか。 (2)特色は何か。 (3)旧西ドイツと旧東ドイツのどちらか。 写真のポイントと場所は以下の通りである。 写真1は広場と市庁舎(ミュンヘン) 写真2は活発な消費行動の様子(ボン) 写真3は公園でくつろいでいる人々(ハンブルク) 写真4はガストアルバイターの子ども(ゴスラー) 写真5は古い住宅(ガーデブッシュ) 写真6は都心にある住宅地(旧ベルリン) 東西ドイツ統一における課題を考察する。 Question 3 東西ドイツの統合は旧西ドイツと旧東ドイツの人々の生活にどのような変化をもたらしたか。 『旧西ドイツ』の変化 旧東ドイツから通勤、買い物の自動車による交通渋滞・自動車事故・騒音・排気ガスなどの深刻さ 統合による特需と財政赤字による物価の上昇 増税、社会保障費の値上げ 『旧東ドイツ』の変化 失業者の増大と外国人排斥の風潮 交通渋滞・自動車事故・大気汚染の発生	V T R の視聴は、10分程度とする。 Q1...発言から資料読解能力と表現力を観る。 【関】 評価の方法 発問・挙手・発表 Q2...写真の中に旧東ドイツまたは旧西ドイツとなる根拠を考えさせながら、東西の地域格差について理解する。 【知】 評価の方法 発問・挙手・発表 Q3...旧東西ドイツにおいて統合後の課題が多いことを確認する。 【知】 評価の方法 発問・挙手・発表	

資料

注
(1)

45分	”シュタージ(国家秘密警察)症候群” 旧東ドイツ人の劣等感と旧西ドイツ人の優越感 統合が順調に進んでいないことを理解させる。	
・今後のヨーロッパについて関心をつなげる。	今後ドイツがどのような形で統一を進めていくのか考察する。 ----- Question4 これからドイツはどうなっていくのか考えよう。 ----- ドイツでは、オシー(Ossi)、ヴェシー(Wessi)という言葉が流行していることを紹介し、今後それをどう克服していくかが統一ドイツの課題であり、本時の学習内容からEUによるヨーロッパ統合の課題を推察し、次時への課題とする。	Q4...本時の学習内容を確認し、次時以降の問題提起を行う。 ミニ論文で考えをまとめる。 【思】 ・ユーロ紙幣の提示

<指導上のポイントと考察>

- (1) 本授業は視聴覚教材を授業で有効に活用することをねらいとして授業を展開している。そのために教材の厳選を行った。VTRについては、『人間は何を食べてきたか 肉編』を導入的に使用している。
 また、写真については、岐阜大学小林浩二先生よりお借りした。写真を選んだ観点は、典型的なドイツの景観が見られるものとした。
- (2) 授業では、6枚の写真を使用しているが、1枚の写真から読み取れる情報はたくさんある。写っている人の様子や表情、建物の形などに興味・関心を持たせ、そこからいろいろ思考・判断する力を育てたい。
- (3) 統合ドイツは、旧西ドイツと旧東ドイツから構成されていること、すなわち、過去40年以上にわたって政治・経済・社会体制がまったく異なった二つの国からなっていることを確認する。
- (4) 統合後、二つの国が”統合”に向かって歩み始めているが、それは旧西ドイツが旧東ドイツを併合する形で実現したといえる。したがって、大きく見れば旧東ドイツが「旧西ドイツ化」することになることを理解させる。

資料 ドイツの様子(統合後のドイツ)



写真1 ミュンヘン

まるい帽子をかぶった二つの塔の建物は15世紀に建てられたフラウエン教会でミュンヘンのシンボルとなっている。大きな時計台のある市庁舎の前の広場には、多くの市民や観光客が訪れている。



写真2 ボンの再開発(旧西ドイツ)

伝統的な建造物や通りの改修、歩行者専用の道路の拡大が実施されている。



写真3 ハンブルクの公園（旧西ドイツ）
旧西ドイツの都市には、大きな都市公園が豊富に存在している。



写真4 ガストアルバイターの子どもたち
都市内部には、ガストアルバイターが多く居住している。



写真5 ガーデブシュの町並み
旧東ドイツの都市には、このような古い住宅が多い。



写真6 旧東ベルリンの中心地
旧東ドイツの都市は、画一的である。

< 単元「人種・民族と国家」の指導計画（全7時間） >

- 1 時間目 「人種と民族」
- 2 時間目 「漢民族の生活と文化」 (VTR)
- 3 時間目 「インドのヒンドゥー教徒の生活と文化」
- 4 時間目 「アラブ民族の生活と文化」 (VTR)
- 5 時間目 「ゲルマン系民族の生活と文化」(本時)
- 6 時間目 「ラテン系民族の生活と文化」
- 7 時間目 「スラブ系民族の生活と文化」

注(1) ガストアルバイターとは、旧西ドイツに居住して働く外国人労働者であり、厳密には、募集国出身の労働者（労働協定を結んだ国からの労働者）をいう。1961年に「ベルリンの壁」が構築され、旧東ドイツから流入していた労働力が、ガストアルバイターに肩代わりされることになった。労働協約はイタリア（1955）、スペイン（1961）、ギリシア（1961）、トルコ（1964）、ポルトガル（1967）、ユーゴスラビア（1968）と締結された。ガストアルバイターを出身国別に見ると、1960年代半ばまでは、イタリア人、ギリシア人、スペイン人が卓越していたが、その後、トルコ人とユーゴスラビア人が増加している。なかでも、トルコ人の増加が一著しく、1987年に51.8万人になり、全ガストアルバイターの32.6%を占めている。現在ドイツでは、ガストアルバイターに対して、制限、帰国促進、融合の3つの基本政策をとっている。

注(2) オシー（Ossi）とは、旧西ドイツ人の旧東ドイツ人に対する呼び名、ヴェシー（Wessi）とは、旧東ドイツ人の旧西ドイツ人に対する呼び名である。いずれも相手を軽蔑、見下した言葉である。こうした言葉が生まれたのも、両者の亀裂、対立が深まっていることがわかる。